

## 社会包摂映画制作 2 回目 2023.10.05

「知的障害者が映画を撮る」というプロジェクトに参加していると言うと、すぐに「撮れるの？」という反応が返ってくる。このプロジェクトに参加するまで、僕自身もそう思っていた。

撮れるんです。

工藤真生先生のお声がけで映画界から馳せ参じたのは、「糸」「ラーゲリより愛を込めて」「春に散る」といった第一級のメジャー作品を撮り続けている瀬々敬久監督。プロジェクトのドキュメントを、「へんしんっ！」で2020年度PFFグランプリを獲った新鋭・石田智哉監督が遠隔演出で記録する。筆者・港は特に何もせずそこにいる。さらに九州大学から早瀬百合子先生と高取千佳先生が、カメラマンや制作部、助監督のような役目まで担ってくださるといふ、贅沢というか底恐ろしい現場である。加えて九大の卒業生や学生も都合のつく限り、カメラマンとして参加してくれている。

プロジェクトのご協力をお願いしたのは、社会福祉法人「JOY 明日への息吹」。音楽活動をする“ミュージックアンサンブル”とアート制作をする“アトリエブラヴォ”の二つのグループがあり、高い実績と全国区的な知名度を誇っている。今回、無理に時間をあけてもらい、それぞれのグループから7名のメンバーさんに本企画に参加していただいた。

前回のWSでは、人類最初の映画の一本、リュミエール兄弟の「ラ・シオタ駅への列車の到着」(1895年)と、8ミリフィルム、16ミリフィルムの上映、そしてパラパラ漫画の動画を使って映画の原理を瀬々さんがレクチャーした。その後、JOY 倶楽部近くの公園で各自好きなようにスマホで動画を撮ってもらい、その上映会を行った。生まれて初めて動画を撮ったメンバーも多く、我々の間にも「人が映画を発見する瞬間」に立ち会えた感動があった。



2回目となる今回のWSは「編集」。この日から、瀬々さんの「ヘヴンズ・ストーリー」「明日の食卓」「ユダ」などを手掛けた編集者の今井俊裕さんがパソコン持参で参加してくれた。メンバーが先日撮った素材をある程度編集し、それをメンバーに見てもらい、作品完成の方向性を確認する作業だ。これは通常の映画制作で行われるプロセスとほとんど同じである。パソコンを前に、左右を瀬々さん、今井さんに挟まれながら、編集された素材を見せられ、「どうしたいのか」と監督としての意見を求められる。(こんなん、おれでも緊張するわ…) と思いながら、開始時間を待つ。

ちなみにこの作業を行うためにお借りしたのは、JOY 倶楽部の「宿泊練習室」。寝室や風呂が揃っている。JOY 倶楽部のメンバーは音楽旅行や美術の展示などで、地方のホテルに宿泊することが多い。不慣れなビジネスホテルで戸惑うことのないように、緒方理事長が私費を投じて作った空間だ。特にシャワーを出す際には注意が必要で、温度調節に慣れていないと熱湯で火傷をしてしまう可能性もある。このような設備の存在を知ることにも、このプロジェクトに参加した意味がある。

一人目のディレクターが現れた。絵師・Aさん。前回、彼の撮った動画は我々に衝撃を与えた。公園の木々にカメラを向けながら「まるで樹海のような」というナイーブな口調のモノローグで幕を開け、自殺や死など、作者の希死念慮を窺わせる内省的な言葉が滔々と語られるショートフィルム。彼の言語/映像両面のセンスは玄人はだしで、我々の中に確実にあった何らかのフィルターを瞬時に叩き壊した。

今回、瀬々さんはそんな彼のモノローグを字幕にして素材に挿入してきた。早速、見てもら

う。ところが A さん、顔を覆い隠して恥ずかしがる。そもそも自分のモノログと声が恥ずかしいのに、それを字幕として見せつけられるのがさらに恥ずかしいのだという。だが瀬々さんは「そう？字幕にすることで虚構度が上がってない？生々しさが消えたと感じない？」「……そうかもしれない」。



A さんのモノログは自殺や死を中心に語られるため、一見非常にきわどい印象を見る者に与える。「この人、大丈夫かな？」と不安にさせるようなリアリティがある。だが実は A さんは「ひぐらしの鳴く頃に」のようなアニメーションのテイストを参照したのだと語っている。声優による独特の言い回しや、自意識をめぐる果てのないモノログといった、日本のある種のアニメーションの虚構性を援用することで、自殺や死という、自らの語りた主題を語りやすくしたのかもしれない。彼はその繊細な感性とは裏腹に、表現者としてのしたたかな戦略性を秘めているのだ。だから、自分のモノログを他者から見せつけられるという、即物的な「恥ずかしさ」はあるにせよ、「字幕をつけることで虚構度が上がる」という指摘は、彼にテクニカルな話として通じたに違いない。急に作者であることを取り戻し、以降の作業は順調に進んだ。

ところが最後に A さんにはさらに過酷な自意識滅却の苦行が待っていた。「まるで樹海のようにだ」というキーとなる言葉をタイトルにすることが決まった。ついては、声をタイトルに被せたいので、ここでアフレコをして欲しいと瀬々さん。A さんはギョツとする。公園で動画を撮っていた時は、一人で、集中してその言葉を言えたが、ディレクションされる状態で、それをやらねばならない。「まるで樹海のようにだ」「なんか違うなあ」「まるで樹海のようにだ」「もうちょっと大きな声で」。菅田将暉や二宮和也や佐藤浩市に演技をつけてきた瀬々演出が、演技などしたことのない A さんに容赦なく炸裂する。「A さん、これはもう自意識との

死闘だよ！やるしかないんだよ！」と心の中で応援する。最初は究極の羞恥にもがいていた A さん。でもこれは創造行為なのだとすぐに気づき始めた。求めに応じて様々なバリエーションの「まるで樹海のような」を表現し始めた。（うーん、これは違うな）みたいな顔をして、自分から新しいバージョンを口にしたりしている。いつしか自意識の鎧はすっかり剥がれ落ち、一緒になってひたむきに正解を探る表現者の姿がそこにあった。

すべてを終えた彼は「(まるで樹海のような、なんて) 余計なこと言わなきゃよかった」とはにかんでジョークを言い、「絵の方がいい」とオチをつけた。でも動画という表現方法は彼に合っていると思う。はたらきかけ次第では、これからいくらでも、どこまでも才能を伸ばせる人物に見えた。理事長によると、彼は普段は内省的な眼差しで自己否定的なモノローグを呟くことが多いが、今回は非常に優しく楽しげな目つきで編集作業を楽しんでいたという。そんな話を聞くと、迷惑をかけているという意識が強いこちらとしては、少しだけ救われる思いがする。

二番目に現れたのは絵師・B さん。彼は公園の道だけを黙々と撮ってきた男だ。なぜ道か。公園のてっぺんに慰霊碑があるからだ。彼はそこへ向かう足取りを、ただひたすら無心に撮った。荒い息遣いもそのままに。B さんは寡黙で、すべてを行動で示すタイプの人間に見える。その重心の低さと強い信念を伺わせるまなざしは、求道者のそれだ。B さんはかつて四国八十八カ所を母親とともに回ったことがあり、これまでも仏像をモチーフとした絵画作品を数多く描いてきた。だからスマホを渡された彼が、公園そのものではなく慰霊碑へ続く道だけを撮影してきたのは非常にうなずけることだった。



彼の映像の求道的な世界観を際立たせるために、瀬々さんは四国八十八ヶ所巡りの礼所の御詠歌を劇伴として重ねてきた。見終わった B さんは一言、「最高です」。シンプルで力強い感想を告げた。B さんは誰にでも心を開くタイプではなく、誰とでも円滑にコミュニケーションをとってくれるわけでもない。ついでに付け加えるとあまり長く同じところに座ってられるタイプでもなく、落ち着きがないと聞かされている。そんな彼の「最高です」は、おそらくは相当な褒め言葉として捉えていいはずだが、その回答は彼なりの気遣いだったことがすぐに判明する。何度か素材をリフレインしていると、実は出来栄えに不満を覚えていることが少しずつ伝わってきた。瀬々さんと今井さんがそれを察し、コミュニケーションを図りながら不満の正体を探っていく。やがてそれが何なのかが判明した。仏像だった。

瀬々さんが素材に挿入していたのが、彼の手掛けた仏像の絵画作品数点である。その中に六地蔵をパンで捉えたショットがあるのだが、尺の都合上、左端と右端の仏像を割愛していたのだ。B さんはご自身の絵画作品を挿入されたこと自体は喜びつつ、六地蔵のうち二体が「見切れてしまった」のを見過ごせなかったのだ。瀬々さんと今井さんがそれに気づいたとわかるや、B さん、突然、職人の親方口調で命じる。「やり直せ!」。きょうび瀬々さんに「やり直せ!」って命じる人誰もおらんよ……と思うけど、我々もすでにわかっている。それは横柄な性格からでたものとかそういうことではない。要求したいことがあるときに、たまたまチョイスされた言語がそれなのだ。彼の性格ではなく、タイミング的にキャッチされた言葉がそれなのだ。だから、今井さんが六地蔵をすべて収めた編集に仕上げたのを見ると、めっちゃ可愛く「やったあ!」。なんやねん……。

そこからの彼はまさにディレクターだった。「もっと大きくしたい」。六地藏の全体像をフレームに収めたいと言い出す。瀬々さんは見栄えの問題として「それだとしんどくない?」「しんどくない」。即答だ。意思が強い。そしてかなり細かい部分を気にする。画家の目である。職人の頑固さである。その妥協しない姿勢は、瀬々さんや今井さんに響くものがあったようだ。三人の作業は不思議と巨匠の作品の編集現場のような、重心の低い雰囲気を醸し出していった。これはのちに緒方理事長が驚きとともに告げたことだが、集中の続かない彼にしては稀有なことに、45分間一度も立ち上がることなく作業に集中した。剛毅な表現者としての素顔をむき出しにしてくれた。妥協を許さないアーティストだった。

これ以降も二日間にわたってCさん、Dさん、Eさん、Fさん、GさんというJOY倶楽部のメンバーたちとのセッションが行われ、その一人一人に特筆すべき事項があったのだが、紙数が尽きた。ここで何が起きている、という雰囲気を少しでも感じていただけたら幸いである。

こんな企画を受け入れてくれたJOY倶楽部のメンバーたち、日々彼らとの信頼関係の構築に心を砕かれている職員さんたち、そしていつもこちらのわがままを聞き入れてくださる（そのための調整を多方面でしてくださっている）緒方理事長に、心から感謝したい。